

タイにおける日本留学事情

元在タイ日本国大使館一等書記官 打田剛

筆者は 2021 年3月から 2024 年8月まで3年5か月在タイ日本国大使館で勤務する機会を得た。この間、日本政府国費留学生の選考を中心とした事務に携わり、タイにおける日本留学に関する様々な事情を知る機会を得た。

国費留学生の選考では留学希望者の書類選考や面接を通じ、どのような人が留学を希望しているのか、日本留学にどのようなことを期待しているのかを知ることができた。

大使館の仕事を通じて元日本留学生と交流する機会も多くあり、元留学生の留学中の経験や留学後の活躍についても知った。

筆者はタイ赴任前には、タイとの接点もなく、また留学を通じた日本と外国との交流についても考える機会もなかったが、在タイ日本国大使館における勤務を通じて、タイにおいて日本留学の人気の高いことや、タイの多くの人々が日本に対して好感を持っていることに驚かされた。

本稿では、この3年5か月のタイでの勤務経験を通じて知った、タイにおける日本留学事情を簡単にまとめたものである。

なお、本稿における見解に当たる部分は筆者個人のものであり、所属する組織のものではない。写真は全て筆者が撮影したものである。

1 タイから日本への留学生数

独立行政法人日本学生支援機構(以下「JASSO」)の調査¹によると、タイから日本への留学生は、2023年5月1日現在で3,616人となっている。国(地域)別では12位となっている。過去10年間のデータは表1のとおりである。

表1 タイから日本への留学生数の推移²

年	留学生数	構成比	国(地域)別順位	留学生総数
2023年	3,616人	1.3%	12位	279,274人
2022年	2,959人	1.3%	10位	231,146人
2021年	2,563人	1.1%	11位	242,444人
2020年	3,032人	1.1%	11位	279,597人
2019年	3,847人	1.2%	9位	312,214人

¹ 独立行政法人日本学生支援機構「2023(令和5)年度 外国人留学生在籍状況調査結果」

² 独立行政法人日本学生支援機構の2023年度から2014年度の間「外国人留学生在籍状況調査結果」から筆者作成。

2018年	3,962人	1.3%	9位	298,980人
2017年	3,985人	1.5%	9位	267,042人
2016年	3,842人	1.6%	9位	239,287人
2015年	3,526人	1.7%	7位	208,379人
2014年	3,250人	1.8%	6位	184,155人

タイから日本への留学生数については、この10年間の間でおおむね3,000人台で推移している。一方で構成比(留学生総数に占める割合)、国(地域)別順位は低下している。タイから日本への留学動向に大きい変化はないが、他の国がタイよりも多くの留学生を送り出すようになったことから留学生総数に占める構成比、国(地域)別順位が低下したものと考えられる(表2参照)。

この間留学生総数も大きく増えているが、表2のミャンマー、スリランカ、モンゴルなど2014年時点ではタイよりも送り出し数が少なかった国からの留学生が大きく増えて、留学生総数を押し上げるとともに、タイの構成比、順位を低下させることになったと考えられる。

表2 出身国(地域)別留学生数上位12か国(2023年と2014年の比較)³

順位	2014年		増減	2023年	
1	中国	94,399人	↗	中国	115,493人
2	ベトナム	26,439人	↗	ネパール	37,878人
3	韓国	15,777人	↘	ベトナム	36,339人
4	ネパール	10,448人	↗↗↗	韓国	14,946人
5	台湾	6,231人	↗	ミャンマー	7,773人
6	タイ	3,250人	↗	台湾	6,998人
7	インドネシア	3,188人	↗↗	スリランカ	6,819人
8	マレーシア	2,475人	↗	インドネシア	6,552人
9	アメリカ合衆国	2,152人	↗	バングラデシュ	5,326人
10	ミャンマー	1,935人	↗↗↗	アメリカ合衆国	4,076人
11	モンゴル	1,548人	↗↗	モンゴル	3,677人
12	スリランカ	1,412人	↗↗↗	タイ	3,616人

³ 独立行政法人日本学生支援機構の2023年度及び2014年度の「外国人留学生在籍状況調査結果」から筆者作成。

タイの海外留学生に占める日本留学生の数

タイから海外に留学する学生数は表3のとおりである。日本とほぼ同じ人数規模であるが、タイの人口は日本の約半分(57%、2021年)なので、人口当たりの留学生数は日本の約2倍となり、日本に比べて非常に留学が盛んであると言える。































表3 タイ・日本の留学生数⁴

	タイ	日本
2022年	29,585	31,286
2021年	28,500	29,393
2020年	33,289	32,875
2019年	33,586	32,220
2018年	33,644	32,103
2017年	32,577	31,771
2016年	30,991	31,679

留学生総数について留学先別のデータはないが、タイ政府奨学金等により留学する者については統計があるため、留学先の上位10か国(地域)を整理してみたのが表4である。

⁴ UNESCO INSTITUTE FOR STATISTICS ”TOTAL OUTBOUND INTERNATIONALLY MOBILE STUDENTS STUDYING ABROAD”(2025年2月26日閲覧)出典 URL;
<https://databrowser.uis.unesco.org/browser/EDUCATION/UIS-EducationOPRI/int-stud/outbound>

表4 タイ政府奨学金等留学生の留学先上位10か国(地域)⁵

	2014年	2019年	2024年
1位	 1,297	 1,198	 745
2位	 1,295	 875	 687
3位	 296	 140	 264
4位	 243	 112	 91
5位	 169	 104	 88
6位	 126	 62	 58
7位	 108	 47	 42
8位	 93	 42	 20
9位	 48	 23	 17
10位	 48	 20	 15
11位以下合計	247	116	134
合計	3,970	2,739	2,161

※グラフ内の数字は留学生数(単位:人)

※横棒グラフは各年における留学生数の留学先別割合を示す。

※各年の順位

2014年:米、英、日、独、豪、仏、中、蘭、タイ・スイス(同数で9位。タイは国内進学。)

2019年:英、米、日、独、豪、蘭、中、仏、ニュージーランド、カナダ

2024年:英、米、日、豪、中、独、蘭、仏、台湾、韓

イギリス、アメリカは常に上位1、2位を占めており、留学生数も圧倒的に多くこの2国だけで常に6割を占める。英語圏の強みであろう。日本は3位として安定的な位置を占めている。非英語圏の中では1位を占め続けていると見ることもできる。留学生総数に占める留学先別の留学生の割合では、日本は2014年には7.46%であったが2024年には12.22%となっており、留学先としての人気が高まっていると考えられる。

また、台湾、韓国は、近年留学先として人気が高まっているが、2014年にはそれぞれ26位(3人)、19位(9人)であったのが、2024年に9位、10位となっており、この間に着実に留学生数を伸ばしていることが確認できる。

⁵ タイ公務員委員会事務局(Office of Civil Service Commission)の各年度の5月時点の統計表から筆者作成。出典 URL; <https://www.ocsc.go.th/scholarships/statistics/>

2 国費留学生選考の経験から

筆者は 2021 年から 2024 年まで毎年約 150 人の国費留学生希望者を面接してきた。その経験を通じたタイ人の日本留学希望者がどのような志望動機を持っているのかなどを述べる。

アニメ・マンガの影響力

筆者が国費留学生の応募書類の査読や面接を通して得た肌感覚としては、タイの学生が日本留学を考え始めたり、日本語を勉強し始めたきっかけは、8割方がアニメの影響だという印象である⁶。今の親世代が子供だった頃から親しまれている「ドラえもん」のような日本のアニメから、比較的最近のものでは「名探偵コナン」「クレヨンしんちゃん」なども幅広く放送され親しまれている。日本のアニメを観て日本に興味を持った、アニメの主題歌を歌いたくて日本語を勉強し始めた、という人がかなり多い感じがある。40 代のタイ人の友人はアニメ「聖闘士星矢」を観て日本語を勉強し始めたと言っていた。



写真1 ショッピングモール「セントラルワールド」の飾り付け(2023年11月28日筆者撮影)

⁶ 国際交流基金「海外の日本語教育の現状 2021年度 海外日本語教育機関調査より」p29によれば、東南アジアにおける日本語学習者の日本語学習の動機は、第1に「日本語そのものへの興味」、第2に「アニメ・マンガ・J-POP・ファッション等への興味」、第3は「日本での将来の就職」となっている。出典 URL;

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf>

タイでは日本の専修学校(専門学校)への留学希望者が多いが、一番人気があるのが、アニメーション制作を学ぶ専門学校への留学となっている。また、アニメの中で描かれている日本の風景や事物に興味を持って、日本がどういう国なのか実際に行ってみたくなったことが、留学先として日本を選ぶ理由になっているということがよくあり、理系の学生などでも、学びたい分野は欧米の大学でも学べるが、日本で生活してみたいので、日本留学を希望する、という者が少なくない。

マンガの影響力も大きい。非常に多くの日本のマンガがタイ語に翻訳されているので、タイ語で読んでいると思われるが、マンガで日本文化に興味を持った、とか日本のマンガが大好きで日本に関心を持った、日本語を学び始めた、日本に留学したくなったという志望者も本当に多い。専修学校留学の希望でアニメーション制作と並んで人気が高いのはマンガ・イラストレーションを学ぶ専門学校である。

このほか、日本のテレビゲームが好きで日本に興味を持ち、ゲームクリエイターになるために日本に留学したい、という者もいる。

タイにおいて日本のアニメ・マンガは広範に親しまれており、日本への関心を持つ最大のきっかけとなっていると言っても過言ではない。

その他の日本文化の影響

アニメ、マンガ以外の日本文化としては、J-POPなど音楽の影響もある。AKBなど日本の若者の好む音楽をインターネットを通じて聞いていたり、テレビドラマを見たりしている者もいる。音楽の影響に関しては、近年 K-POP が世界的に人気であるが、タイでも人気が高く、これに伴い韓国語学習者が増加する、韓国留学するタイ人の若者が増えるという影響が出ており、文化的な魅力と語学学習、留学は相関性があることが見て取れる。

日本食を日本の魅力に挙げる者も多い。タイでは日本食の人気が高い。寿司はもちろんのこと、たこ焼き、とんかつと言った普通の日本料理も人気があり幅広い日本の食文化への関心が存在している。余談であるが、筆者がタイに駐在していた時のタイの流行語の一つが「omakase」であった。高級すし店などで、店側にメニューをお任せする意味で日本でも使うが同じようにタイでも高級日本料理店で「omakase」として、同じような注文をする店が出現しており、流行になっているようであった。また日本の緑茶も人気があり「Oishi」ブランドのペットボトルも発売されている。



写真2 「味」の下にタイ文字で「oishi(おいしい)」と書かれているペットボトルのパッケージ(筆者撮影)

文化的な影響について総括的なことを述べると、日本への留学を決める理由として、日本の大学を知っているからというよりも日本の文化、社会の魅力を感じて、日本に留学したい、という声が多い感じがある。留学先選びは「大学選び」ではなく「国選び」の面が大きいと思われる。

旅行

面接で、家族旅行で日本に行き、日本の環境の良さや交通の利便性などを知り、ここでなら生活できそうだと、思っって日本留学を現実的に考え始めた、ということもしばしば聞いたことである。

タイでは、旅行先として日本の人気が高い。例えばタイ字紙最大手のタイ・ラット紙の記事(2023年6月17日)によれば、旅行予約サイト Agoda による調査で、タイ人が行きたい旅行先は1位日本、2位韓国、3位ベトナム、4位台湾、5位マレーシアとなっている。また、旅行に行きたい都市は、1位東京、2位ソウル、3位シンガポール、4位香港、5位台北となっている。

留学は長期間外国に住むことになるので、旅行で日本の気候や街の様子など生活条件を掴んでこの国なら留学できそうだと、という感じを持つことが日本を留学先として選ぶ材料となっている様子である。

青少年交流

日本政府や民間組織が実施する青少年交流事業がある。例えば、「アジア高校生架け橋プログラム」「さくらサイエンス」(文部科学省)、「JENESYS」(外務省)や AFS の高校生留学など、1週間から1年ぐらいいまで様々な期間の青少年交流事業がある。こう

した事業で日本に触れて、日本でもっと勉強したい、日本の大学に行きたいと思ったという候補者も多い。

青少年交流事業は、留学促進のための事業ではなく、国と国の相互理解、友好親善関係の構築に向けた取組であるが、留学を促進するという効果も多分に有していると考えられる。

このほか、日本の魅力として技術の先進性を挙げる者も多い。日本ブランドの自動車や電気製品などから、日本の技術に学びたいと感じる者も多いようである。

欧米と比較した場合の日本の魅力としては、上述のような日本文化の魅力以外に、欧米に比べて、日本は文化的な差が小さく、生活に適応しやすいということや、距離が近いので一時帰国しやすいということを挙げる者もいる。

日本語教育

国際交流基金の調査によれば、2021年度には183,957人の日本語学習者がいる。タイの中等教育では第二外国語が広く教えられており、日本語が選択科目として学習できる学校が多い。日本の高校でも英語科のように英語に特に力を入れるようなコースが設定されていることがあるが、タイの高校でも、日本語を学ぶコースがあったり、第二外国語を選択科目として学ぶカリキュラムになっていて、その一つとして日本語の授業を選択することができる、という学校が少なくない。このような中等教育段階で日本語を勉強してきている高校生が日本の大学への留学を志望することも多い。特に文系志望者は既にかなり日本語ができる者がいる。

日本語学習の動機としては、肌感覚であるが、日本のアニメを幼い時から視て育っており、アニメをもっと楽しみたいからとか、アニメの主題歌を歌いたいからというような理由が多い印象がある。好きなアニメをひたすら見ているうちにN3レベルの日本語力をつけてしまったという者もいた。独学で日本語をある程度のレベルまで習得している者も少なくない。

表5 各国・地域の日本語学習者数⁷

順位	国・地域	学習者数
1	中国	1,057,318
2	インドネシア	711,732
3	韓国	470,334
4	オーストラリア	415,348

⁷ 国際交流基金「海外の日本語教育の現状 2021年度 海外日本語教育機関調査より」表1-2-2を元に筆者作成。

5	タイ	183,957
6	ベトナム	169,582
7	米国	161,402
8	台湾	143,632
9	フィリピン	44,457
10	マレーシア	38,129

高等教育段階についてみると、国際交流基金が実施した 2021 年度日本語教育機関調査によると、国立・私立大学を合わせて 70 以上の大学で日本語教育が行われている。そのうち主専攻学科を持つ大学は、国立が 32 校、私立が 8 校となっている。⁸学部段階で日本語を勉強した後、日本の大学院に留学し、日本語学や日本文学などの研究に進む者もいる。日本語能力を生かして専門学校に留学し、アニメーション、イラストレーション等の分野に進学するケースも国費留学生では多い。

日系企業

タイには約 6,000 社の日系企業が進出しており、日本語を勉強することが、日系企業での勤務で有用であることも日本語を勉強したいという動機を与えているものと考えられる。ただし、面接で接した印象では、高校生は、将来日系企業で働きたいから、日本に留学したいという感じはなく、先述のような日本という国の魅力から日本留学を考える者が多い感じがある。

日本語学科を卒業したタイ人に聞いたところでは、親に日系企業がタイに多く進出していることから、将来役に立つと勧められて、日本語学科への進学を決めた、という者もあり、保護者が日系企業への就職を意識して子供に日本語を勧めることもあるようである。

表6 国・地域別の日系企業数(2022年10月1日現在)⁹

順位	国・地域	企業数
1	中国	31,324
2	米国	8,673
3	タイ	5,856
4	インド	4,901

⁸ 国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 タイ(2023年度)」出典 URL;

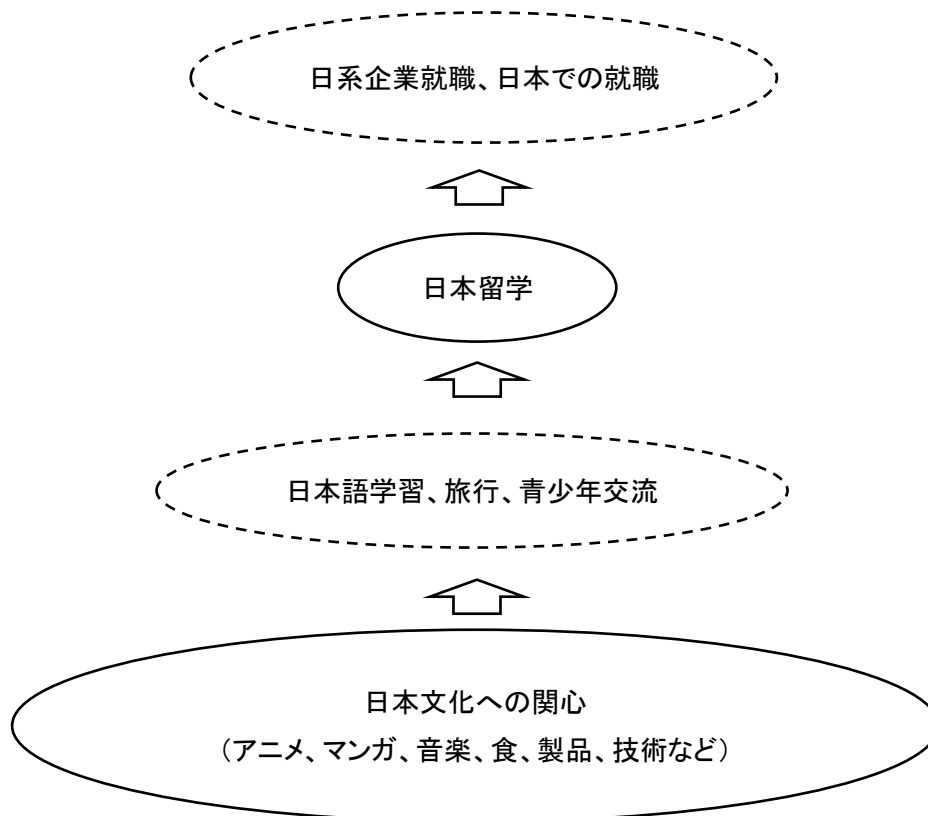
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2023/thailand.pdf>

⁹ 外務省「海外進出日系企業拠点数調査」(2022年調査)から筆者作成。企業数 1,000 以上の国を抜粋。出典 URL; https://www.mofa.go.jp/mofaj/ecm/ec/page22_003410.html

5	ベトナム	2,373
6	インドネシア	2,103
7	ドイツ	1,918
8	マレーシア	1,593
9	台湾	1,502
10	フィリピン	1,434
11	メキシコ	1,312
12	シンガポール	1,084

小括

タイ人が日本留学する理由についてまず文化的な関心、特にアニメ、マンガなど青少年が親しみやすいポップカルチャーを通じて日本に興味を持つ、ということがある。日本語学習や旅行を通じて日本との距離が縮まり、さらに、日系企業への就職等の現実的な要素が合わさって日本留学へのモチベーションを作り出していると考えられる(下図)。



(図) 日本留学に関連する事象の連関

3 帰国留学生

前節まで、日本に留学するタイ人留学生の概況、留学の要因を述べてきた。本節では帰国した元日本留学生の活動について述べる。

同窓会組織

タイには元日本留学生会の組織がある。最大の包括的な組織としてタイ王国元日本留学生協会 (Old Japan Students' Association, Kingdom of Thailand Under the Patronage of His Majesty the King。以下「OJSAT」という。)がある。創立は1951年(世界の元日本留学生会の中で最古)、会員数は3,867人である¹⁰。1年以上の日本留学が入会要件となっている。同会は、タイの元日本留学生同窓会組織の中で唯一法人格を持っており、傘下に地域ごとの元日本留学生会や、職業別の元日本留学生会を擁している。

バンコクに本部事務所を持ち、同窓会事務を行うとともに、併設する日本語学校において日本語教育や、日本留学情報の提供を行っている。また、国際協力基金が実施する日本語能力試験(JLPT)や日本学生支援機構が実施する日本留学試験(EJU)の実施業務の受託などにより、自己収入を確保し自立的に経営を行っている。



写真3 OJSAT 事務所(バンコク都パヤータイ区)(筆者撮影)

¹⁰ 日本学生支援機構帰国留学生会リスト 出典 URL;

https://www.studyinjapan.go.jp/ja/assets/pdf/network/list/asia/thailand_01_202401.pdf

タイでは、もう一つの大きな元日本留学生のグループとして、泰日経済技術振興協会 (Technological Promotion Association (Thai-Japan)。通称「TPA」あるいは「ソーソー トー」)がある。こちらは高度経済成長期に通商産業省が中心となって行った海外技術者の研修事業を経験した者が中心となって結成しており、工学系人材が多くを占めている。

TPAも語学学校の経営や語学書の出版、計器校正などの業務を行い、自立的に運営を行っている。2007年には、日本型ものづくり教育を実現するために泰日工業大学を創設し、その運営を行っている。



写真4 泰日工業大学(バンコク都スワンルワン区)(筆者撮影)

OJSAT、TPA 以外にも、日本留学経験のある教員を会員とする(タイの)大学ごとの元留学生会や留学先大学ごとの同窓会、日本政府国費留学生の同窓会、日本学術振興会の支援を受けた経験のある研究者を会員とする JSPS タイ同窓会 (JSPS Alumni Association of Thailand) などがある。

こうした同窓会組織は、異なる大学で学んでいた留学経験者を横に繋ぐとともに何世代もの留学経験者を縦に繋ぐことにより日本留学経験者を組織化し、一つのまとまりを与えている。このことは、日本留学経験者にとっても帰国後のネットワーキングとして有意義であるとともに、大使館など留学に関わる日本側にとっても、組織的に活動してくれるカウンターパートとなってくれる点で非常にありがたい存在である。大使館の業務においても共同で日本留学説明会を実施する、日本語弁論大会を共催するなど、様々な場面で OJSAT と協力することがあった。

元日本留学生は日本の良き理解者であり、日本のサポーターになってくれる存在であり、日本にとって非常に重要な財産である。在タイ日本国大使館も元留学生との交流を維持するとともに、元留学生の同窓会活動を支援することは重要であるとして、OJSAT の各種イベントに館員が出席するとともに、OJSAT の歴代会長には外国人叙勲を行ってきている。



写真5 元 OJSAT 会長プラキット氏への叙勲伝達式(2024 年6月 13 日筆者撮影)

活躍する元日本留学生¹¹

行政の分野では、多くの元日本留学生が重要な地位に就いている。タノン・ピタヤ元財務大臣(横国大)、シントーン・ラーピセートパン元駐日大使(横国大)、パッタラット・ホットン駐印大使(上智大)、スワポン・シリソーン駐ネパール大使(政研大)、ピムチャノック・ウオンコポン・ピットフィールド WHO・WIPO 常駐代表兼大使(政研大)、ユタサック・スパソーン観光庁長官(慶大)、パヌワット・トリヤンクンシイ工業省副次官(東工大)など幹部公務員も多い。

軍ではウィラット・ウィジャン元海軍副司令官(海軍大将)(海上自衛隊第一術科学校)、ジョーム・ルンサワーン枢密顧問官(空軍大将)(防大)が挙げられる。

経済界では、レーンチャイ・マラカノン元タイ中央銀行総裁(第 17 代)(慶大)、タリサ・ワタナゲス元タイ中央銀行総裁(第 21 代)(慶大)、スポン・チャユサハキット元タイ公共交通公社副社長(東大)、ケラティ・キツマナワット タイ空港公社社長(東大)などが挙げられる。

活躍する者が最も多いのは教育分野であろう。現職の学長クラスでは、スパサワット・チャチャワント タマサート大学学長(神戸大)、コムサン・マリーシー モンクット王工科大学ラカバン校学長(東海大)、ワッチャリン・ガーサラック ブラパー大学学長(三重

¹¹ 地位は執筆開始時(2024 年6月)のもの。

大)、クリサダ・ヴィサワティーン 泰日工業大学学長(京大)など元日本留学生が著名な大学の学長に就いている。元職ではキットィチャイ・トライラッタナソイリチャイ元コンケン大学学長(新潟大)、プラキット・タンティサノン元モンクット王工科大学ラカバン校学長(東海大・電通大)が挙げられる。副学長、学部長クラス、一般の大学教員については枚挙にいとまがない程多くの元日本留学生が活躍している。

文化関係では、日本でも「マムアンちゃん」で知られる漫画家のウイスット・ボンニミット氏(筆名「タムくん」、京都精華大)が著名である。

現在社会の若手・中堅層を占めている元日本留学生の中から、先人に続いて活躍する者が輩出されることが期待される。

4 むすび

留学には多面的な意味があると考えられる。佐藤由利子『日本の留学生政策の評価』(東信堂)を参考に述べれば、留学生送り出し国の発展への貢献、日本の大学の国際化の推進、日本と送り出し国の友好関係の促進などが挙げられる。タイに勤務していて一番感じたのは、日本とタイとの友好関係の促進という要素だった。

日本留学を経験して、大学で日本語教員として、日本語の学習者を増やし、次の世代の日本への関心を高める、日本の社会や経済を研究して、それをタイに応用することを試みる、そういった元留学生の活動が、日本への高い関心を持続させている。

タイでは数多くの日本の書籍が翻訳されており、日本への関心や理解を高める一助となっているが、こうした日本の文化・学術を咀嚼し、タイに取り入れる活動にも元日本留学生が大きく寄与している。さらに、帰国後にインフルエンサーとして日本の魅力を発信するなど、元留学生は様々な面から日本を紹介し、日本の魅力を広める役割を果たしている。第2節で留学に関する事象の連環を図に示したが、元日本留学生は、図中の「日本文化への関心」を増幅する働きをしていると言える。

表6に示したように、タイには世界で3番目に多く日系企業が進出しているが、日本企業の進出においても、元留学生が大きく貢献している。日系企業において、元留学生が通訳など日本人とタイ人をつなぐ役割を果たすなど、日系企業の事業活動を円滑にしているということがある。

世代を越えたエコシステム

教育分野では、日本の大学院で博士号を取り、タイに戻って研究者となった元留学生が、日本の大学教員と共同研究を行う、自分の研究分野の大学院生を日本に留学させるなど、世代を越えて日タイのネットワークが繋がっている様子も見られる。留学を通じて、日タイの人の循環・日本とタイの教育交流のエコシステムが形成されていると言えるだろう。

日本語という観点では、日本に留学して日本語を勉強・研究していた者がタイに戻ってから中等教育機関や大学で日本語教員となり、日本語を教えるようになり、日本語を勉強するタイ人が増え、その中から、日本に留学して、また次の世代の日本語の教育者になっていくというサイクルが見受けられる。

さらに、そうした継続的、再生産的な日タイの人の交流があることにより、日本に対する好印象がタイで広まり、留学経験者に限らず、広くタイ社会で日本に対する好印象が共有されることにより、日本が好きな人、日本をよく理解している人が増えて、日系企業の活動や政府間の外交にもプラスになるというような日タイの友好の好循環、友好・協力のエコシステムが形成されている。このエコシステムの一要素として留学が大きな役割を果たしている、ということを感じた。

留学を通じて日タイの絆が強くなり、将来にわたる両国の友好につながることを期待したい。